

# 短期大学の授業におけるAI活用の実践報告： 教育現場からのケーススタディ

## Practical Applications of AI in Education: Case Studies from a Junior College

畑 由美子 石川 由紀子 亀田 多江 石川 智仁  
川島 秀明 青野 健作 石井 健司

### 1. はじめに

ChatGPTをはじめとする生成AIの公開以降、教育におけるAI活用については多くの議論がなされている。学習効果の上昇や業務の効率化が期待される一方で、AIへの過度な依存による思考力や表現力の低下が懸念されるなど、教育現場におけるAI活用に対して消極的な態度も少なくない。実際に学習場面での学生の生成AIの利用実態については、大森他(2023)の行った学生のChatGPTの利用実態についての調査があげられる。大森他(2023)によると、ChatGPTを使ったことがある学生は、大学生の32.4%となり、レポート執筆に利用したことがある学生は、ChatGPT利用者の43.2%、大学生全体としては約14%となった。学習の場ではそれほど多くの利用は見られないことがわかる。

大学・高等専門学校における生成AIの取り扱いについて、文部科学省(2023)は、「各大学・高専において、具体的に行われている教育の実態等に応じて対応を検討することが重要であり、学生や教職員に向けて適切に指針等を示すなどの対応を行うことが望ましい」としている。いくつかの留意

点を示すものの、各教育現場の実態に応じた、継続的・主体的な指針等の見直しや組織的な対応を検討することの必要性を述べている。また、2024年7月には文部科学省の専門家会議<sup>1</sup>が開催された。ここでは、パイロット校での事例をもとに、「小中高の学校段階にあわせた取り扱いや留意点を具体的に示すことや、教員の働き方改革に向け校務での活用を全国的に推進するための施策、それにAI時代の教員に求められる役割などを議論していく(NHK ニュース 2024)」こととなった。

また、教育現場におけるAI活用の実践については、各授業や単元ごとの取り組み事例は多くあるものの、大学教育での全学的な取り組みの報告は未だ少数である。竹中他(2024)では学部教育におけるAI活用の実践報告をするとともに、より良い教育方法の模索や教育制度の質的变化の可能性についても指摘している。こうした指摘からも、今後は教員個人のAI活用だけでなく、大学教育全体のAI活用を通じた教育の在り方の検討が必要になってくると考えられる。

そのような中で、創価女子短期大学では、AI活用教育に力をいれ、2023年5月より、AI活用推進WG(ワーキンググループ)を発足した。そこでは、情報、英語、ビジネス、日本語文章表現系の科目を担当する教員が所属し、AIを活用できる人材育成を考えていくための提案や実践について議論が行われた。また、個々人の生成AIの利用実践を共有しあい、全学における科目を横断した「SWC-AI活用教育の枠組み」について検討していった。「SWC-AI活用教育の枠組み」は、(1)「AIを活用したスタディスキル」、(2)「ビジネス現場でのAI活用に生かせるスキル」、(3)「AI活用の理解と思考力の育成」の3点を軸とし、各科目においてどのようにAI活用教育を行えるのか共有していった。

本稿では、このワーキンググループでの検討を踏まえ、短期大学の授業での実践や検討を通じた教育現場におけるAI活用について報告する。また、情報系科目のみならず、ビジネス系科目や英語教育科目、日本語文章表現科目での科目を横断したAI活用教育の枠組みの実践から、分野を超えたAI活用の可能性と展望について検討の一助とする。

---

<sup>1</sup> 初等中等教育段階における生成AIの利活用に関する検討会議(第1回)

## 2. 各授業における実践報告

以下では本学国際ビジネス学科で実施した生成 AI 活用の取り組みについて、情報系科目、ビジネス系科目、英語科目および日本語文章表現科目の順に述べる。

### 2.1 情報系科目「コンピューターリテラシー」(亀田多江担当)での取り組み

#### 2.1.1 授業概要 (履修人数 14 名 / 演習形式 / 1 年生春学期)

本授業は、1 年次の春学期に開講している必修の演習科目 (教養科目) で、学生生活に必要なコンピュータの活用スキルを習得する科目である。具体的には、パソコンの基本操作および、短大で標準的に利用するソフトの操作方法、活用方法を学ぶと共に、Microsoft Word の MOS 試験一般レベルの内容を習得する。1 クラス 15 人前後で 6 クラスが同じ内容で 4 人の教員で実施している。今回の亀田の担当クラスは 14 名 1 クラスである。

本授業での AI 活用授業は、学生生活に必要なコンピュータ活用スキルの一つとして学ぶものである。授業回は、学内でのパソコン活用の基礎を学習 (学習ポータルサイトの利用法、Word ソフトの基礎、ドライブ利用法等を習得) した上で、主に第 3 回、第 4 回に実施した。内容は、短大において共通に活用していく生成 AI サービスの利用環境を整えるところから、基本的な使い方を知り、「AI を活用したスタディスキル」の基礎を学ぶまでの内容とした。本授業での学びを通して、学生一人一人が、生成 AI の性質を理解した上で、授業や自主学習、日常生活で積極的に AI を活用していける力を身につけることを目標とした。

#### 2.1.2 AI 活用の取り組み

本授業で AI を活用するにあたって、学生生活で積極的に AI を活用していくための学びであることを伝えるため、授業資料にキャッチフレーズ「AI 活用スキルを身につけて、短大での学びを充実させよう！—“SWC-New Student Life with AI” 今、ここから始まる」を明記し、学生に周知をして授業を進めた。

授業においては、数多く出てきていた生成 AI 活用法の書籍<sup>2,3</sup>をテキストに利用することも考えたが、短大生の授業や学生生活に沿った学びを効率的にできるように、書籍や紹介サイト<sup>4,5,6</sup>を参考にしながらも、独自に内容を組み立てて授業を行うこととした（図1）。

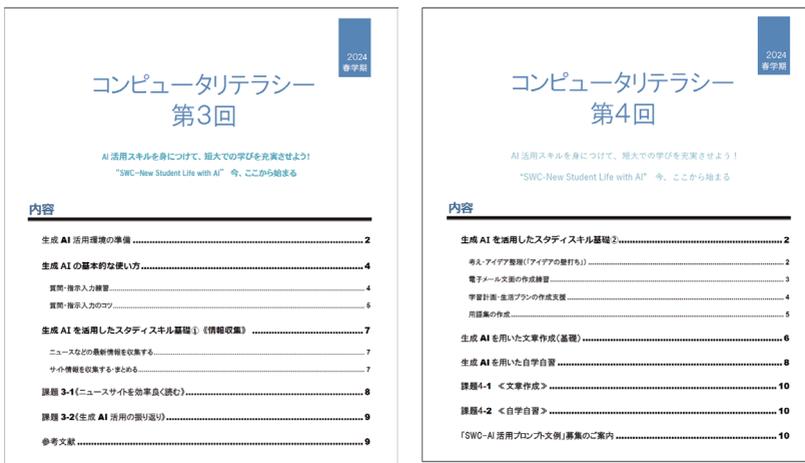


図1 独自に内容を組み立てて作成した授業資料の表紙（一部）

授業概要は、次の通りである。

### 1) 生成 AI 活用環境の準備

まず、本学で用いた主な生成 AI サービスである Microsoft 社の Copilot と、OpenAI 社の ChatGPT を日常的に活用していただけるように、サービスの利用登録から、ブラウザ（Edge）へのお気に入り登録等、活用環境を準備した。

- 2 マイカ「ゼロからはじめる なるほど! ChatGPT 活用術 ～仕事の効率が劇的に変わる AI 使いこなしのヒント」技術評論社、2023 年 7 月出版
- 3 ChatGPT ビジネス研究会「ChatGPT 120%活用術」宝島社、2023 年 5 月出版
- 4 Infolio「Promptia: ChatGPT などので使える文例集」、<https://prompt.que.jp/>、2024 年 3 月参照
- 5 note「深津式プロンプト・システムで ChatGPT を最大限に活用する方法」[https://note.com/discovery\\_ai/n/nb42d8fba539d](https://note.com/discovery_ai/n/nb42d8fba539d)、2024 年 3 月参照
- 6 AI BRAINY「ChatGPT の【深津式プロンプト】とは?」[https://www.ai-brainy.net/hukatsu\\_prompt/](https://www.ai-brainy.net/hukatsu_prompt/)、2024 年 3 月参照

また、利用目的に合わせて使い分けられるように、それぞれのサービスの特徴を説明しながら利用練習を行った。AI利用の注意点については、「AIの回答に誤りがあることを認識し、確認・自己判断の上で情報活用すること」「学生として身につける学びの弊害にならないように注意をして利用すること」「AIを活用して作成した資料にはその旨を明記すること」「個人情報を入力しないこと」「授業に関する利用は各担当教員の指示に従うこと」を確認した。

## 2) 生成AIの基本的な使い方

次に、生成AIを有意義に活用するためには、質問・指示入力の方法が重要であることを説明した上で、入力方法とコツを説明し、練習しながら学習するようにした。「質問を重ねながら得たい情報を得ること」「回答条件・形式を具体的に示すこと」「役割を与えること」「深津式プロンプト」等を学習した。練習例題の1つとして、「AIの回答には誤った事実が含まれることがあること」を学べるように、AIで良く知る地域の旅行プランの作成を行い、内容確認し、ディスカッションするようにした。このように、生成AIの特質を理解して活用できるように促した。

## 3) 生成AIを活用したスタディスキルの基礎

基本的な使い方を学習した上で、授業や学生生活で活用していけるように、次の通りスタディスキルの基礎を学習するようにした。

### 【情報収集】

情報収集においては、最新情報を活用できるように、主にCopilotを利用することとした。具体的には、「ニュースなどの最新情報を収集する」「webサイト情報を収集し、まとめる」「ニュースサイトを要約し効率良く読む」などを行った。特に、課題として、①ある分野（今回はAIを分野とした）における複数のニュースをピックアップし、②それぞれを要約し、③複数の要約から動向をまとめるまで、AIとの対話を重ねながら効率よく行う課題に取り組むようにした。

**【アイデアの整理】**

生成 AI を自分の考えやアイデアを整理するサポーターとして利用する「アイデアの壁打ち」を実践的に学習するようにした。①まずテーマ（今回は「プラスチックごみの削減について、私達ができること」とした）についてグループディスカッションし、②次に、テーマについて、生成 AI と壁打ち（自分の考えを AI に投げかけて意見を貰ったり、逆に具体例を 10 個挙げてもらうなど）をし、③再度、今度は AI との壁打ちで考えを整理したり、広げたりした内容を基に、グループディスカッションをした。④そして、AI を活用したアイデア整理を行うことの効果について感想を述べ合った。

感想においては、「自分が考えたことは簡単で数もあまり出せなかったが、生成 AI は思いつかなかったアイデアを数多く出してくれてとても勉強になった。そして、生成 AI と壁打ちを行った後での話し合いは、それにより更にアイデアが広がって良かった。会話の幅が広がったことを実感した」ことが多く語られた様子であった。これらを通して、学生に生成 AI の活用効果を実感してもらうことができた。

**【メール文面の作成練習】**

昨今の学生は、SNS 等で Chat 形式でコミュニケーションを取ることが主になっており、メールのマナーが定着していない学生が多い。そのため、状況に合わせたメール文面作成の練習を AI との対話で行うようにした。具体的には、「教員への課題提出メール」「教員への面談のお願いメール」「(就職活動先) 企業への返信メール」等を AI が提示する例文を基に検討・作成し、添削するようにした。

**【学習計画・生活プランの作成支援】**

学生生活の中で、生成 AI を活用する例として、学習計画や生活プランを作成する練習を行った。

学習計画においては、本学の多くの学生が挑戦している TOEIC を例にして次のような例題を示しながら作成練習を行った。「TOEIC を 350 点から 450 点に上げたいと思います。特にリスニングを伸ばしたいと考えています。半年間の勉強計画を一緒に考えて下さい」「最初の 1 週間で、何をするのが

よいでしょうか」「1日1時間の勉強時間を確保したいと思います。1時間で行う内容を提案して下さい」等である。

生活プランにおいては、1週間の夕食プランと買い物リストの作成を、深津式プロンプト形式で示し作成練習を行った(図2)。買い物リストの指示は、「買い物リストを表にまとめてください。項目は、食品、分量、商品選びのアドバイスの順です」とし、表形式で出力するようにし、Excelに落とせるようにした。

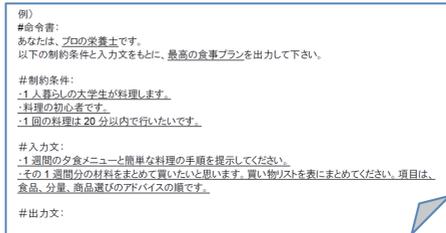


図2 1週間の夕食プランと買い物リストの作成プロンプト例

【用語集の作成】

本学は資格・検定試験の取得支援にも力を入れていることから、資格試験に出てくる用語集の作成を例題にして練習を行った。例えば、MOS試験の用語集作成においては、次のような入力を用いた。具体的には、「MOS試験のExcel365一般レベルに出てくる関数のリストを整理して表にしてください。項目は、関数名、引数の内容、説明、例示の順でお願いします」と指示するようにした。この出力においても、Excelに落とせるようにした(図3)。



図3 用語集作成例 (MOS Excel365一般レベルにおける関数リスト)

【生成AIを用いた文章作成(基礎)】

生成AIを用いた文章作成の基礎として、簡単な例題を用いて手順を学ぶようにした。文章作成のテーマは「学生生活における生成AIの活用」とし、

400字程度の文章をまとめるものとした。具体的な手順としては、①アウトラインの作成、②文章作成、③文章の添削、④タイトルの作成とした。①アウトラインの作成においては、事前課題として自分の考えについていくつかまとめておくようにし、それを基にアウトライン作成をAIで行うようにした。また、AIが提示したアウトラインを基に、自分の考えで項目を追加・削除して、調整するようにした。②文章作成においては、アウトラインに基づいて、まずは自分で文章作成することとし、その後、AIに文章を作成させ、AIによる文章を参考に、自分の文章をブラッシュアップするようにした。③文章の添削においては、AIを用いて「より適切な表現や改善点を指摘」「大学生らしい文章に直す」などを行った。④タイトルの作成は、まずは自分でタイトルを考え、次に生成AIにタイトル候補5つを挙げてもらった。その上で、自分で考えたタイトルをもとに、生成AIで挙げられたタイトル候補も参考にしながら、タイトルを決めることとした。

こちらで示した手順でAIを用いた文章作成の練習をすることで、短大で身につけるべき学びの弊害にならないようにAIを活用する力を身につけられるようにした。

### 【AIを活用した自学自習】

AIを活用することで自学自習ができることを示し、活用練習を行った。自学自習としてのAI活用方法は多種多様にあるが、授業では、今後、自分で調べたり、試行錯誤をしながら、自分のスタイルでAIを活用できるよう活用の幅を広げていくことを目標に示し、いくつかの活用例を練習するようにした。また、授業に沿った学びとしてどのように活用していくことが適切かは、履修している授業担当教員の方針や指示に従うように確認した。

取り扱った活用例は、①学びの整理・深化、②練習問題の作成と添削、③英会話の練習等である。①学びの整理・深化では、授業で学んだ内容（キーワードなど）について、情報を整理したり、深めたりするようにした。具体的には、（キーワードに関する）理解しておくことと良い内容、事例、大事にすべき本質をAIと対話しながら学ぶ練習を行った。②練習問題の作成と添削においては、授業で学んだキーワードなどを基に、練習問題を作成するようにした。記述式、選択式、穴埋め問題等を作成し、解答・解説も示すように

した。ただし、解答や説明が間違っている場合があることも認識しておくように確認をした。③英会話の練習では、AIを相手に英会話を行い、間違いを訂正したり、より良い表現をアドバイスしてもらうことも含めて練習をした。

### 2.1.3 まとめと展望

本授業では、生成AIサービスの利用環境を整えるところから、基本的な使い方を知り、「AIを活用したスタディスキル」の基礎を学ぶまでの内容を行った。授業内容を作り上げるにあたっては、学内のAI活用ワーキンググループの会議に、授業内容案を事前提示し、グループメンバーの意見を取り入れながら更新を重ねた。例えば、練習例として取り挙げる内容が、他の授業でAIを活用せずに学ばせたい内容に影響しないような例題を挙げるように調整した。また、スタディスキルの基礎としてのAI活用の学びと、AIを活用した各専門分野の学びとで、両者の授業の繋がりをスムーズにできるように、取り扱う内容の角度や深さを話し合いながら調整した。更には、本授業内容で扱う「AIを活用したスタディスキルの基礎」を、全教員が把握し、全学的に他の授業にスムーズに繋げていけるように、全教員を対象としたFDを2回開催し、本授業内容の共有と、AI活用についての議論を行った。

本授業を履修した学生は、本授業でのAI活用の学びを土台に、殆どの学生が、他の授業や学生生活で継続的に生成AIを活用できていることが、授業での学生の反応からわかった。

これらのことから本授業でのAI活用の学びは、本学全体での「SWC-AI活用教育の枠組み」の「AIを活用したスタディスキル」分野において、その第一歩となる「スタディスキルの基礎」をしっかりと定着させることができたと言える。

更なる取り組みとして、授業の最後には、「SWC-AI活用プロンプト文例」募集の取り組みも行うことを案内した。これは、“創価女子短大生(SWC)の、短大生による、短大生のためのAI活用プロンプト文例集”作成を目指して、広く短大生から効果的・効率的に活用できた生成AI活用プロンプト文例を募集するものである。今後は、学生も巻き込んで、大学全体としてAIを活用した質の高い学びを推進していきたいと考えている。また、秋学期には、

1年次の必修科目であるビジネスコンピューティングにおいて、「生成AIを活用したチラシ作成」を行い、学内コンテストも開催し、更なる活用の流れを作っていく予定である。

#### 2.1.4 小括

コンピューターリテラシーにおけるAI活用では、短大で標準活用する生成AIの利用環境を整えるところから、基本的な使い方を知り、「AIを活用したスタディスキル」の基礎を学ぶまでの内容を行った。具体的なスタディスキル基礎の学びは、AIを活用した情報収集、アイデアの整理、プランの作成、用語集の作成、文章作成基礎、自学自習等を演習形式で行った。本授業での学びを通して、学生が生成AIの性質を理解した上で、授業や自主学習、学生生活で積極的にAIを活用していけるようにすることができた。今後は、本授業を土台に、大学全体のAIを活用した質の高い教育に繋げていけるように取り組んでいきたい。

## 2.2 ビジネス系科目「観光とビジネス」(川島秀明担当)での取り組み

### 2.2.1 授業概要(履修人数60名(1コマ30名、2コマ)/講義形式(グループワーク有り)/2年生秋学期)

本科目は2年次科目として秋学期に1コマ30名を上限に2コマ開講されている。講義の前半部分は主に観光学に関する基礎知識を中心に学ぶ。ここでは観光学の歴史的な流れと共に、観光産業についての現状理解、課題を認識していく。講義の後半はグループワークを実施する。クラス内を旅行業、宿泊業、交通運輸業、その他(展示・鑑賞施設、テーマパーク、お土産)という4つのテーマに分け、各領域における現状の取り組みの調査、抱えている課題の抽出を行った上で、テーマに関する新規提案を行う発表会を実施する。

観光学に関する言葉や観光の歴史的流れを学び、合わせて、観光が持つ意味や効果を理解すると共に、これからの観光産業の興隆に寄与する新たな提案を行う。

### 2.2.2 AI活用の取り組み（案）

本科目は秋学期に開講されていることから、2024年度秋に実施予定の活用の取り組み案を示す。

講義前半で学んだ知識に基づき、講義の後半に行うグループワークでAIを活用することを検討している。グループワークは1グループ5人を上限としたグループで行われ、旅行業、宿泊業、交通運輸業、その他（展示・鑑賞施設、テーマパーク、お土産）の4つのテーマに分かれて調査、分析と発表を行う。

AI活用は、①各テーマにおける課題の抽出、②各テーマにおける観光資源の抽出、③新規提案の企画案作成で採用する予定である。

### 2.2.3 まとめと展望

活用案①課題の抽出では、観光業が、市場環境や景気、国際情勢等、様々な要因に左右される産業であることを踏まえ、環境要因と課題の関係性を見極めるために行う。例えば、観光立国推進基本計画が閣議決定された2012年以降、「訪日外客数の推移」（図4）<sup>7</sup>は順調に伸びてきた一方、2019年に発生した新型コロナウイルス感染症を経て、急速な減少、そして現在の回復

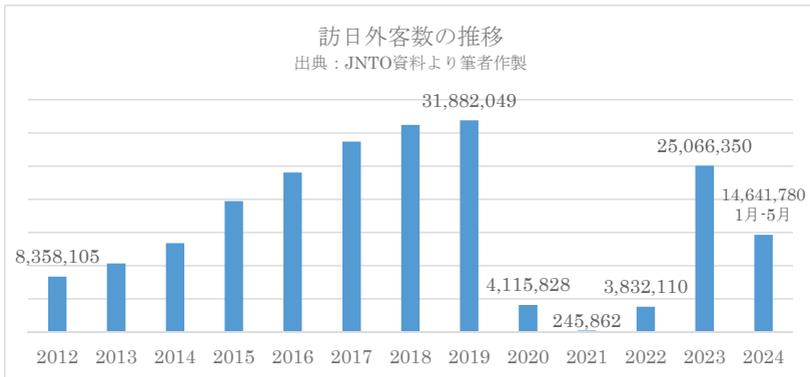


図4 訪日外客数の推移

<sup>7</sup> 日本政府観光局（JNTO）「日本の観光統計データ」<https://statistics.jnto.go.jp/> 2024年8月 参照

基調と、環境変化が大きいことから、コロナ禍以前の課題と、コロナ禍における制限下での課題、そしてコロナ禍を経てインバウンド需要が戻りつつある現在の課題を分けて検討する必要がある。いかなる環境下における課題なのかを理解する必要があるため、AIを活用して得られた「課題」の内容が、観光産業の置かれている現状と適合するかどうかを見極める力を養いたい。また、②の観光資源の抽出についても①と同様に、環境変化に応じて資源としての見方が異なってくる（有益な資源が廃れていくことや注目されていなかったモノやコト等が資源として注目されるようになる）ことや、労働集約的な産業であり、かつ消費行動を取るのもヒトである観光業におけるヒトの捉え方（利益を上げる存在でありコストを増大させる存在でもある）など、ビジネス知識と共に、観光産業の特徴を理解した上でまとめる力を養いたい。③についてはプレゼンテーションの企画立案を支援するツールとしての活用を想定している。

「観光とビジネス」におけるAI活用では、現状に基づく具体的な情報収集と共に、新たな可能性を発見するためのきっかけ作りを狙いの一つとする。この科目での活用によって、学生自身が多角的な視点や、内部資源と外部環境要因との関連性への視点を持ち、正確な情報収集と考察力を付けることが期待される。また、グループワークにおける取り組みであることから、意見交換や議論を通じた主体的かつ協働的な活用となり、コミュニケーション能力と共に、多様な価値観を涵養することが期待される。

#### 2.2.4 小括

観光とビジネスでは、定められたテーマにおける課題の抽出、観光資源の抽出、そして新規提案の企画案作成で採用する予定である。

観光産業は市場環境や国際情勢等、周辺環境に大きな影響を受けるため、環境要因と観光産業との関連を適切に理解し、状況変化によって異なる資源の価値の変化を理解することを目指す。また、講義と共に、グループワークを通して多様な物の見方を養うと共に、観光産業に新たな可能性をもたらす企画提案を行う。

## 2.3 ビジネス系科目「経営戦略論」(川島秀明担当)での取り組み

### 2.3.1 授業概要(履修人数約40名/講義形式/2年生秋学期)

この科目は、2年次秋学期に開講される講義形式の授業である。履修人数は40名程度から100名程度まで年度によって差が見られる。経営戦略論の全体像を学んだ上で、戦略とは何か、そしてその活用について、理論と実証を織り交ぜながら学ぶ。特に、競争環境や優位性の構築という基本的な概念を軸にしながら、持続可能性や創造性・創造的戦略、そして価値の転換など、現代企業に求められる戦略的意思決定のあり方までを学んでいく。

### 2.3.2 AI活用の取り組み(案)

本科目は秋学期に開講されていることから、2024年度秋に実施予定の活用の取り組み案を示す。

AIの活用は、①競争優位の原理とその理論への理解を確認する、②担当教員によって用意されたAIによる回答内容の真偽の見極め、③戦略論の現代的な課題の検討、で採用する予定である。

### 2.3.3 まとめと展望

AI活用の取り組みについて、①を行う目的は、AIを活用して理論の正確な理解を促すことである。特に、講義内容についての履修学生の知識の差や、理解度の差を減少させることが狙いとなる。具体的には、経営戦略論における諸理論について、AIに解説、説明させ、その結果を活用する。②では、あらかじめ担当教員がAIに対して求めた戦略理論の説明や戦略モデルの適用について、得られた結果を学生に提示した上で、真偽を見極める議論をさせる活用である。AIから得られた回答が必ずしも学術的あるいは現在の見解として支持されていない場合があることを理解することを目的とする。ここでは小グループでのディスカッションおよび教員による解説も取り入れる。そして③は、古典的な戦略論の理解から、現在に至るまで支持されている見解であっても、国や地域における経済的要因、社会的要因はもちろん、法規制や法整備等を考慮して適応する必要があることから、積み重ねてきた理論が現代に適応可能かどうかを検討しながら、これからの戦略論のあり方を議論するために利用する。また、今日のAIの興隆や技術革新による

製品ライフサイクルの展開の速さなど、外部環境の変化を捕らえた上で、新たな戦略理論の可能性を検討しつつ、戦略理論の課題を踏まえて創造的な戦略の検討も行いたい。

正確な知識を養うと共に、周辺環境を認識しながら、戦略論の柔軟な活用、企業への適用、そして新たな方向性を検討する力を養うことを目的とする。

### 2.3.4 小括

経営戦略論では、次の3点を目的としてAIを活用する。まず、AIに競争優位の原理とその理論について説明させ、履修学生の知識や理解の差を削減させること。次に、あらかじめ担当教員によって用意されたAIによる回答内容について提示し、ディスカッションと解説を通じて真偽を見極め、理論を正しく理解すること。そして、現代企業の置かれている環境を踏まえ、戦略論の現代的な課題を検討しつつ、これからの戦略論の方向性や新たな理論について検討する。

## 2.4 ビジネス系科目「SDGsと経済社会」（青野健作担当）での取り組み

### 2.4.1 授業概要（履修人数55名／講義形式／1年生春学期）

本科目のテーマは「SDGsとビジネスの関係」について、理解を深めることである。具体的には、SDGs（持続可能な開発目標）について、全体像（17のゴール、169のターゲット、244の指標）を把握し、国際的な社会課題を理解するとともに、現実的な実践論として、何ができるかを考え、具体的な実行に移すための知見を深めることを目標とする。そして、ビジネスとSDGsの関係を理解することで、グローバル社会における社会課題とその解決策を考える素養を身につけることを目指している。講義では、SDGsを、ベーシック・ヒューマン・ニーズ、持続可能な経済、環境保護、達成のための前提条件といった様々な角度から学習し、その上で、国家、大企業、中小企業、公的機関、個人といった各次元から、具体的な事例を説明しながら、問題意識を深めていく。最終的に、個人のレベルで社会課題に対して何ができるかを考えていくことを目指している。

日本では、SDGsの「認知度」は高まっているが、その「理解度」は先進国の中でも最低レベルにある。したがって、本講義を通じて、SDGsの理解

を深めていくためにはどのような学びが必要かという問題意識に基づいて、様々なテーマと角度（歴史観、国際関係、地方自治、ビジネス、各論テーマなど）から SDGs の理解度を深めていく授業設定にしている。

## 2.4.2 AI 活用の取り組み

SDGs の 17 のゴールは、グローバルな社会課題の中の優先的課題を「見える化」したものである。そして、マクロの視点から 17 の国際目標を掲げつつ、ミクロの視点からは「誰も置き去りにしない」という基本理念を軸に、いわば「一人を大切にする」という視座を提供している。したがって、2030 アジェンダや 17 のゴールには、明示的に記載されていない社会課題が多く潜在している。例えば、近年、「合理的配慮」を必要とする学生は増加傾向にある。独立行政法人日本学生支援機構の調査結果によると、令和 4 年 5 月 1 日現在における生涯学生数は、過去最多の 49,672 人（全学生数の 1.53%）で、障害学生在籍学校数は 970 校（全学校数の 82.6%）となっている。この「合理的配慮」と SDGs の関係は、一見すると目標 4「質の高い教育」や「誰も置き去りにしない」といった基本理念から導き出されると考えられる。しかし、このような視点も ChatGPT を活用すると理解がより深まることが分かる。例えば、2030 アジェンダには「国際法への尊重」（パラグラフ 10：主要原則）や「国際法に対するコミットメントを確認するとともに、新たな開発目標は、国際法の下での権利と義務に整合する形で実施することを確認する」（パラグラフ 18：総論）が記されている。これに関連するものとして、2006 年に国連で採択された「障害者権利条約」が挙げられる。同条約によると、障害は、その人本人にあるのではなく、社会との相互作用によって生じたハードルが障害であるという考え方が示されている。そして、同条約第 2 条には「合理的配慮」が定められており、第 32 条には「国際協力」が定められている。そして第 32 条によると、締約国に対して、「国家間において並びに適当な場合には関連のある国際的及び地域的機関並びに市民社会（特に障害者の組織）と連携して、適当かつ効果的な措置をとる」ことを課している。同条約の締約国は 186 カ国（2023 年 1 月）であるのに対して、SDGs は国連全加盟国 193 カ国が合意しており、その違いはあるものの、ChatGPT を活用して同条約と SDGs の関係を調べると、「SDGs 目標 17 と障害者権利

条約（CRPD）は、協力とパートナーシップを通じて障害者の権利を強化し、持続可能な開発を実現するために相互に補完し合っています。目標 17 の実現は、CRPD の目的を達成するための基盤を提供し、CRPD の実施は目標 17 の理念に基づく国際的な協力をより効果的にするための一部となります」と記されている。こうして、2030 アジェンダや SDGs に明示的に記されていない論点を生成型 AI により見出すこともでき、その上で、障害者権利条約が日本国内で具体的な政策としてどのように実施されているかも調査することができる（国内的には障害者基本法の改正、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の制定、学校教育法施行令の一部改正などの国内法を整備し、インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育を推進している）。そして、「合理的配慮」が SDGs でどのような位置づけになっているかを理解することで、SDGs で研究されているガバナンスの手法やパートナーシップの構築方法など、具体的な対応策を効果的に研究することが可能となり、これまで得られなかった新たな視座を提供することが可能になる。

このように SDGs と生成型 AI は非常に親和性が高く、本講義においても SDGs の理解度を深める意味でも有効的な利用が可能となる。そして、本講義では定期試験以外に、2 通のレポート課題を課しており、その課題の中で生成型 AI を有効的に活用できるような課題を出すことで、ChatGPT への質問を通して自分で考えながらも、効果的な情報を入手することが出来る講義を設定している。ただし、ChatGPT の活用をやみくもに奨励するものではなく、その点は学生の判断に委ねており、今後はより効果的に SDGs の理解度が深まっていけるような仕組み（質問の仕方の精度を上げる学習方法）を検討していくことが課題である。

### 2.4.3 まとめと展望

学生の活用状況だが、例えば、「SDGs の取り組み」について調査させると、ChatGPT の活用では「一問一答」で得られた情報のみの理解になってしまい、追加的な質問もしくは異なった角度の質問をすることが課題として挙げられる。自分自身で考えて、何に対する課題が考えられるのかという問題設定をした上で、国際社会での取り組み（もしくは国連及び国際条約との関係）、それを踏まえた上での国内政策の調査結果を導き出し、個人として何ができ

るかなどを考えていくプロセスを示していくが必要になるだろう。

SDGsと生成型AIの親和性は高く、地球上の課題を調査する上では非常に効果的なツールになり得る。そして、身近な事例から国際問題及び国内政策との関連性も理解することができることから、いかにして効率的に活用することができるかを講義でも示していくことが今後の課題にもなってくるだろう。講義の中で、教員が実践的に活用の仕方を示しつつ、学生にも活用しながらグループディスカッションも交えることで、より効果的な学習が可能になることが期待される。

#### 2.4.4 小括

本科目では、SDGsとビジネスの関係を主たるテーマに扱いつつ、SDGsの理解度を高めることを目指している。近年、日本ではSDGsの認知度は90%以上を超えるものの、その理解度は先進国の中でも最下位レベルという調査結果も出ている。このような問題意識の中で、個人としてSDGsに対してどのように向き合っていくべきかを、総論（歴史観・国際関係・地方自治）、各論①（ビジネス）、各論②（貧困、気候変動、人権等）の構成で講義を行った。学生にはレポート課題と定期試験を課しているが、その中で、ChatGPTの活用を推奨し、SDGsの諸問題（17のゴールの背後にある様々な社会課題）を発見するプロセスも学習している。ChatGPTの活用とSDGsの学習は親和性が高く、今後の課題としては学生がいかに追加的な質問を投げかけることができるかとともに、教員がその活用事例を示しつつ、グループディスカッション等を随時使いながら、SDGsの理解度を深めていくことが考えられる。

## 2.5 英語科目「Global Business II (E-Swans クラス)」(石川智仁担当)での取り組み

### 2.5.1 授業概要（履修人数13名／演習形式／2年生春学期）

E-SwansのGlobal Business IIは毎週1回90分の授業が行われ、受講者数は13名である。この授業は英語特別プログラム（以下、E-Swans）の学生のみが受講できるクラスのため、他の一般の学生が受講する授業よりも比較的高度な内容となっている。授業内容は、毎回、日本を代表する企業を扱った

英文を扱うリーディング主体のものとなっている。扱う英文の長さは語数としては毎回およそ 700 単語程度である。

### 2.5.2 AI 活用の取り組み

E-Swans の Global Business II における AI の活用は課題において行われた。手順は非常にシンプルなものである。上述の通り、学生は毎回約 700 単語程度の英文を読むわけであるが、その英文（の一部）を AI によりパラフレーズ（類義語などによる言い換えのこと）してもらうことで、教科書の原文との比較を行い、気づいたことを簡単にまとめるというものである。パラフレーズの対象となる原文の長さは語数としては指定していないが、最低基準としてはパラグラフを 1 つ選ぶように学生に指示をした。AI へのプロンプト（命令文）も事前に学生に次のものを指定した。「Paraphrase the following paragraphs, using the vocabulary at the level of B2 or below of CEFR.」。ここでの CEFR というのは国際的な英語の熟達度の基準の 1 つで、今回は B2 という比較的低い水準の英単語を用いるように AI に指示した。課題は、本学のポータルサイトを用いて、学生は以下の 3 点を提出した。すなわち、教科書の原文、パラフレーズされた原文、2 つのテキストを比較して気づいたことをまとめた日本語の文章の 3 つである。

学生の感想としては以下のようなものが大半を占めていた。まず、AI によるパラフレーズされた英文を読むことで、教科書の原文の意味がより明確になったなどの内容理解についての感想である。例えば、わかりにくい表現が AI によって、わかりやすい表現に直されていたようなケースである。例外的にわかりにくくなったというものも一部あった。例えば、原文では *some people* だったものがパラフレーズでは *some* になったようなケースである。ほかにも表現を同義語で書き換えるため、新しい表現に気づいたようなケースもあった。

### 2.5.3 まとめと展望

以上の点を第二言語習得の観点から評価すると概ね以下のようなものになるだろう。まず、AI によるパラフレーズにより、繰り返しや言い換え、意味の明確化などにより、インプットの理解度が増すということである。通常、

このようなフィードバックを得るには相手が必要だが、AI という相手がいることでインプットの理解度が増すことが期待できる。また、AI のパラフレーズにより、原文では扱われていない表現に触れる機会もあるため、学生は自分の知識の欠陥に気づく (noticing the gap) と同時にインプットへの気づきも促されるものと考えられる。

#### 2.5.4 小括

本節では、春学期の英語授業である Global Business II (E-Swans クラス) における AI の活用事例について述べてきた。英語特別プログラムの学生が毎週 90 分の授業で日本企業に関する約 700 単語の英文をリーディングし、AI を使ってパラフレーズを行い、原文と比較して内容理解を深める活動を行った。この活動により、学生は表現の明確化や新しい言い回しに気づくことができた。

### 2.6 英語科目「Global Business II 一般クラス」(石川智仁担当)での取り組み

#### 2.6.1 授業概要 (履修人数 25 名 / 演習形式 / 2 年生春学期)

次に一般の学生が受講する Global Business II における AI の活用事例について述べる。一般の学生が受講する Global Business II も毎週 1 回 90 分の授業が行われ、受講者数は 25 名である。この授業は一般の学生が受講する授業のため、難度は比較的抑えたものとなっている。授業内容は、主に日本の観光地を扱った英文を扱うリーディング主体のものとなっている。扱う英文の長さは語数としては毎回およそ 250 単語程度である。

#### 2.6.2 AI 活用の取り組み

既出の事例とは対照的に、この活用事例はテスト作成時の教員による活用事例である。こちらは非常にシンプルである。すなわち、教科書の本文を用いて、AI に内容理解の問題を作成してもらおうというものである。プロンプトは日本語で「以下の英文をもとに、英語で内容理解の問題を 20 問作成し、最後に解答と解説を加えよ。」というものである。これだけである。

### 2.6.3 まとめと展望

AIを活用することで以下のような恩恵が得られるだろう。まず、英文の内容理解の問題は教員が自分で作るとなるとかなり時間のかかるものであるが、AIを活用すると瞬時に作成してくれるために作業時間が劇的に短縮される。今回はAIに問題を20問ほど作成してもらい、教員の役割はそこから良問を選ぶ、あるいは修正を行うというものである。最初は疑心暗鬼ではあったが、AIはとてもよい問題を作ることに正直驚かされた、というのが率直な感想である。問題も慎重に読まなければならないものも含まれているので気が抜けないのである。このようにAIを活用することで作業時間の短縮が可能となる。何かを生み出すことは非常な労力を伴うが、出てきたものをチェックすることに集中できるため、疲労感も軽減され、作業に集中できるという利点にもつながるのである。

さらに重要なのは、単に作業効率だけでなく、AIを活用することで教員も成長できる点である。問題を自力で作成する場合、その内容に偏りが出たり、いわゆるネタが尽きるようなこともあるかもしれない。経験の少ない教師であればなおさらである。つまり、自力で問題を作成する場合、自分の殻を破るきっかけがなかなか得られないのである。しかし、AIという新たなパートナーを得ることで、教師はさまざまなタイプの問題に触れることが可能となる。問題作成の気づきを得られる。いわば、自分の殻を外からもつついてくれる存在を得ることで、良問を作成する成長の機会が得られるのである。

以上がE-Swansの学生が受講するGlobal Business IIと一般の学生が受講するGlobal Business IIにおけるAIの活用事例である。授業運営においてAIを活用することで学生も教師も成長の機会を得ることができると思われるので、今後もAIの活用を検討していきたいと思う。

### 2.6.4 小括

本節では、春学期の英語授業であるGlobal Business II（一般クラス）におけるAIの活用事例について述べてきた。日本の観光地に関する約250単語の英文の内容理解の問題を迅速に作成することで、教員の作業効率が大幅に向上し、教師としての成長に寄与することの可能性が示唆された。AI活用

により、学生と教員ともに受ける恩恵が多いため、今後も AI の導入が積極的に検討されるべきであると結論付けている。

## 2.7 英語科目「Discussion on Current Topics II」（石川由紀子担当）での取り組み

### 2.7.1 授業概要（履修人数 9 名／演習形式／2 年生春学期）

本科目は、英語でディスカッションおよびディベートを行うことを通して、さまざまな角度から問題を考察し、自分の意見を英語で表現できるようになることを目的としている。2024 年度は 4 つのテーマ（喫煙、動物愛護、銃規制、環境問題）を取り扱い、5 つのステップを通して学習を行った。まず、①テーマに関する身近な話題についてのディスカッションを通してテーマの導入を行い、②それに関する英語の新聞記事を読み内容を深めるワークを行った。その後③新聞記事のストーリーと登場する人物になりきり英語でスキットを作成してそれを演じるロールプレイを行った。さらに④テーマに関連する議題について、賛成派・反対派の意見をリサーチして集約し、グループにわかれて英語でディベートを行った。最後に⑤その議題に関して自分自身の意見を英語でまとめ、振り返りを行った。この 5 つのステップを通し、履修生にはそれぞれのテーマに関しての理解を深め、多角的な視点を意識しながら現代社会の課題について考え、自身の意見を構築し表現するスキルを身につけることが期待される。

### 2.7.2 AI 活用の取り組み

本科目での AI 活用の取り組みとして、2 点の試みを行った。学生の学習の振り返りに行った英作文での Chat GPT の活用と、ロールプレイの動画編集の際での Vrew（ブリュー）の活用である。

まず、上記「授業概要」のステップ⑤で示した、議題に関して自身の意見を英語で書いて提出する課題について、Chat GPT による添削を導入した。単に自分の意見を書いた文章を翻訳させるだけ、もしくは Chat GPT に意見を代筆させるような事態を避けるため、自力で書いたオリジナルの文章、Chat GPT に添削させた文章、添削を踏まえた最終稿の 3 稿を提出させた。特に Chat GPT に添削させた文章については、添削された箇所を赤字に

して提出するように指示し、文法の誤りやより良い表現についての気づきを促す効果を期待した。

2点目に、上記「授業概要」のステップ③で示した、ロールプレイを行うワークについて、Vrewを活用し動画を作成した。VrewはAIを活用して動画に字幕を多言語で作成することができるアプリケーションで、動画をアップロードすると自動的に音声認識して文字起こしを行い、翻訳して多言語での字幕を表示することが可能である。2024年度春学期では、4つのテーマについてそれぞれスキットを作成し、ロールプレイを行ったが、最初の3つのテーマについては動画ではなく授業内で劇を演じた。スキット作成と演じることにある程度慣れた後、最後の4つ目のテーマ（環境問題）について、動画を撮影し授業内で発表するというワークを行った。Vrewを使うことで瞬時に自動的に字幕を作成することはできたが、編集には時間がかかったようである。その過程で英語と日本語の聞きやすさや見やすさを意識したセリフと字幕作成を行うことの気づきを促した。

### 2.7.3 まとめと展望

本科目においてAIの活用を試みた結果、以下のような効果があったと考えられる。

まず、Chat GPTに自分の文章を添削させ、添削された箇所に注意を払うことで、文法の間違いに気づいたり、より良い表現を学んだりして学生が自分の英文により自信を持って課題を提出することができた。また、教員側としても、これまでしていた添削作業の時間を大幅に削減できたことと、(もしかすると)教員が添削するよりもより良い表現を提案することができたことが利点として挙げられる。英文の添削についてはAIの活用は定着しつつあり、学生にはこれからも利用を促していきたい。そのうえで、自分の意図した表現と異なった提案をされていることがあるのでAIを過信せず利用することなど、留意点を確認するようにしたい。

動画編集にVrewを用いたことに関して、学生は目新しさと面白さから興味を持ち、積極的にワークに取り組んでいた。また、音声を自動的に認識し文字起こしをするため、正しく認識されるために大きな声ではっきり発話するように工夫していた。反面、Vrewに関してはまだ発達途上で音声認識や

字幕の自動作成は完璧とは言えず、認識された音声の正確さを確かめたり多くの修正が必要だったり、編集作業に時間がかかったとの声があった。また、Google Documentのように複数で共有して作業ができないため、グループ内の1人に負担が集中してしまい、グループワークには適していなかったとの意見もあった。アプリケーションの今後の改善を待ちたい。また、動画の作成については、セリフやキャプションを短く区切るなどして、見やすさと聞きやすさを追求する必要があった。今学期ではロールプレイの動画作成は1度限りだったため、複数回作成していく過程で改善されるかもしれない。また、アプリケーションの開発で機能が改善される可能性もある。

本取り組みでは、英語学習にAIを活用することの利点を確認することができた。文法や発話の明瞭さについての気づきを促せたこと、自身の文章や成果物により自信を持って発表できることなど、英語に対する苦手意識などを軽減できたのではないかと考える。今後はディスカッションやディベートを行う際に、テーマに関する多角的な視点や意見を集約する補助をするツールとしてのAI活用の可能性も探していきたい。

#### 2.7.4 小括

Discussion on Current Topics IIでは文章の添削と動画作成の際にAIを活用した。英作文の添削にChat GPTを導入したことにより、学生は自分のオリジナルの文章とChat GPTによる添削を比較し、文法や表現の改善に自信を持つことができた。さらに教員の添削作業も効率化された。また、ロールプレイの動画編集にはVrewを使用し、自動的に字幕を作成することが可能であった。しかし、音声認識や編集の精度には課題がみられた。今後はAIツールの改善を待ちながら、さらなる活用方法を模索していく必要がある。

### 2.8 日本語文章表現科目「アカデミックライティングⅠ」(畑由美子担当)での取り組み

#### 2.8.1 授業概要(履修人数 特設クラス22名、一般クラス25名/演習形式(グループワーク有り)/2年生春学期)

本授業では、日本語でレポートを書くために必要な、「批判的・多角的に様々な資料を読み、資料を活用しながら自分の考えを伝える力」を身につけ

ることを目的としている。また、本科目は4年制大学への推薦編入を目指す学生が受講する「推薦編入特設クラス（以下、特設クラス）」と、一般の学生が受講する「一般クラス」との2クラスに分けられている。それぞれのクラスにおいて授業内容に大きな違いはないが、特設クラスでは大学の調べ方や志望理由書の書き方を学ぶなど、編入学に向けた取り組みも行っている。現代では様々な情報が溢れているため、信頼性の高い情報を得て、事実と意見を区別し、自分の考えをまとめる力が必要となる。こうした力は、社会に出てからはもちろん、特に大学進学を目指す学生にとっても、非常に重要な力となっている。そのため本授業では、レポートの執筆を通して、情報を整理し、根拠をもとに意見を述べる方法を学んでいった。

特に今年度は学期の前半では、日本語エッセイや評論文、新聞記事、新書等の様々な文章を読むことで各文章の特徴を学び、後半では基本的なレポートを書く力を身につけることを目指し学んでいった。また、レポート執筆の際は、プロセスを重視しながら、①テーマ設定、②情報検索、③アウトライン作成・見直し、④執筆、⑤第一稿の見直し（校正）、⑥完成、といったように各回の授業で段階を踏んで進めていき、完成を目指している。

このように、本授業では、レポートを完成させることを目標の一つとはしているが、そこに至るまでのプロセスを通して、情報収集力や読解力、思考力を養うことも目標としている。

## 2.8.2 AI 活用の取り組み

そこで本授業では、AI活用の取り組みとして、レポートの第一稿執筆後に行う校正の際に利用を試みた。また、学生がAIに依存しすぎずに、思考力を養い、より主体的・多角的な学びにするため、以下の3段階に分けて校正を行った。

### 〈校正の手順〉

1. 自分のレポートを読み直し確認・修正
2. 学生同士でアドバイスをしあう
3. 最後にAI活用で自分の文章に対して評価・修正を行う

まずは、学生自身で文章の修正を行う。その際、音読を推奨し、引用箇所や読みにくい文章に線を引きながら読み、適切な引用や読みやすい文章になっているか等、学生自身の気づきを促すよう指導する。次に、ペアまたはグループになり、互いの文章を読みアドバイスをしあう。ここでは細かく正確なアドバイスが難しい場合でも、一読み手としての感想や評価を伝えあうように促した。また、評価をすることが困難な場合でも、他者の文章を読むことで、自身の文章に生かせることはないか考えるよう指導した。その後、AIを活用し、自身の文章の評価・修正を行う。授業の時には「評価を行うためのプロンプト例」と「修正を行うためのプロンプト例」を示し、主にChatGPTを利用した評価や修正を行った。以下に、それぞれのプロンプト例を示す。

#### 評価を行うためのプロンプト例

次の文章は○○をテーマにした大学生のレポートの一部分です。問題がないか以下の観点からないかチェックしてください。

##### # 観点

- ・ 正確性
- ・ 客観性
- ・ 文章の伝わりやすさ

##### # 入力文

\*\*\*\*

### 修正のためのプロンプト例

次の文章は○○をテーマにした大学生のレポートの一部分です。  
以下の条件に従って、文章の校正を行ってください。

#### #条件

- ・ 誤字脱字をなおす
- ・ 書きことばの表現に直す
- ・ だ・である調の文章にする
- ・ 主語と述語のつながりを明確にする
- ・ 一文を簡潔にする

#### #入力文

\*\*\*\*

また、上記の条件では足りない場合は必要に応じて条件を追加したり、ですます調の文体で出力された場合は「です・ます調の文章は使わないでください」と命令文を追加したりするなどして、個々に応じた活用を促していった。

こうした文章校正での AI 活用を通して、2つの効果が見られた。1点目は、学生の視点の広がりである。レポートチェックの役割として使用するため、AIへの依存や学生の思考の妨げにはならず、学生自身の考えや言葉を基にしながら、より読みやすい表現や客観的な視点を得ることができる。実際に、AIの提案を参考にしながら、誤字脱字や言い換え表現などを学び、レポートの書き直しに役立てている様子であった。2点目に、正当な評価を得られる点である。これまでも、ペアやグループワークを通して相互評価を行うことはあったが、学生同士の関係性や個性、学力差等が影響し、活発にアドバイスし合うことが難しい場面が時折見られた。また、グループワークが苦手な学生にとっては、他者から評価をされることは非常に心的な負担も大きい。AIを活用することで、人間関係や他者の目を気にすることなく正当な評価

を得ることができると考えられる。

このような効果もある一方、新たな課題も浮き彫りとなった。まず、AIの提示した表現や内容に対して、学生自身が鵜呑みにすることなく評価する力を養うことの難しさがあげられる。AI活用の注意点として「すべてを鵜呑みにしてはならない」といった点を伝えるものの、学生自身の語彙力や知識量には差があるため、こうした点については個別に対応する必要が出てくる。また、本取り組みのように校正を行う場面でのAI活用を行う際、すでにある程度の文章が書きあげられていることが前提となる。そのため、学生自身が順調に課題に取り組み、第一稿を書き込んでいないと、授業内でAIを活用した校正を行うことは難しい。また、こうした多様な学生の状況に対し、AI活用と対人的な取り組みとのバランスを考慮しながら、学生自身の成長に繋げていくことも課題の一つである。以上の点を踏まえ、文章表現科目におけるレポート執筆段階でのAI活用については、どの段階でどのように活用することが効果的か、さらなる検討が必要である。

### 2.8.3 まとめと展望

以上、本取り組みからレポートの修正・校正のためにAIを活用することについては、一定の効果が期待できることが明らかとなった。AIの提案によるよりよい文章作成ができるようになるのはもちろんのこと、人間関係などの心的な負担を減らしながら、自身の文章に対して客観的評価を得られることが期待できる。一方で、学生の「考える力」を養いつつ生成AIを効果的に使うためには、学生自身の状態や課題の取り組み状況を精査したうえで、どのように活用するかを検討していく必要がある。

また、本取り組みではレポート作成の終盤である「第一稿の見直し（校正）」の段階での活用であったが、今後は「テーマ設定」や「アウトライン作成」等でのAI活用についても検討していきたい。課題の取り組み状況を問わずAIを活用することで、学生の苦手とする箇所を補いながら、よりよいレポート執筆につながることを期待される。さらに、こうした取り組みを通して、これからの文章表現科目の在り方や位置づけについても検討していきたい。

### 2.8.4 小括

アカデミックライティングⅠの授業においては、レポートの第一稿執筆後に行う校正の際にAI活用を試みた。校正の際にAIを活用することで、学生の考えを軸にしながらかも、AIの提案を参考にし、よりよい文章表現や客観的な視点を得ることができた。また、学生同士の相互評価とは異なりAIを活用することで、人間関係からくる心的負担を軽減しながら、客観的な評価を得られるといった効果も見られた。一方で、学生の課題取り組み状況によっては効果的な利用につながらないといった課題も見られた。多様な状況の学生がいる中で、授業内でどのように活用することが効果的か、今後さらなる検討が必要である。

## 3. おわりに

本稿では、創価女子短期大学における授業でのAI活用事例を報告した。前述のとおり、本学では2023年5月に発足したワーキンググループを中心に、「SWC-AI活用教育の枠組み」を定め、科目を横断して授業でのAI活用を推進してきた。第2章2.1で紹介した情報系科目の「コンピューターリテラシー」は、1年次春学期の必修科目として、上述(1)の「AIを活用したスタディスキル」の習得を目指した。主にCopilotとChatGPTを活用して短大での学びの基盤となるスキル(情報収集、アイデアの整理、メール文面の作成練習、など)を習得し、1年次秋学期以降の学びに展開できる内容となった。第2章2.2以降紹介したビジネス系科目、英語科目および日本語文章表現科目は、上述(2)の「ビジネス現場でのAI活用に生かせるスキル」の習得を意識した科目として位置付けられている。ビジネス系科目「観光とビジネス」「経営戦略論」「SDGsと経済社会」では生成AIを活用することによって、学生に多角的な視点をもって考えることを促し、理論の理解を促進できることが示唆された。反面、AIの回答を鵜呑みにすることなく、グループでのディスカッション等を通し主体的に考えていくことの必要性にも言及した。英語科目の「Global BusinessⅡ」「Discussion on Current TopicsⅡ」および、日本語文章表現科目「アカデミックライティングⅠ」の言語に関わる科目では、AI活用を通して学生の多様な表現の習得につながることを示唆された。また、教員や学生間で答えをもらうのではなく、AIを通し

て表現の添削や評価をしていく過程を通して、適切な自己評価をすることができ、自信につながる場面も見られた。一方で、対AIへの個人作業に偏る傾向もあり、グループワークでの活用や対人的な取り組みとのバランスについては課題が残った。いずれの授業においても、「AIの回答を鵜呑みにし過ぎない」といった留意点はあるものの、AI活用を通して多様な視点からの内容理解や表現の習得につながる事が考えられる。

AI活用推進WGを中心に授業でのAI活用を進めていくにあたって、次の2点が大きなポイントとなった。1点目に、「SWC-AI活用教育の枠組み」を作成したことで、全学の科目の位置づけが明確となった。科目の位置づけによって、どのようなスキルを組み込んで自身の授業を組み立てればよいかを計画することができた。そのために大きな役割を果たしたのが、2024年度に2回行ったFD研修である。「AIを活用したスタディスキル」の基礎を習得させる科目の内容を全教員が共有し、学生が1年次春学期の必修科目でどのようなAI活用スキルを学んできているのかを把握することができ、1年次秋学期以降の授業を計画するにあたって有益な情報となった。2点目に、ワーキンググループを中心にAI活用についての活発な情報交換が行われた。他の科目でどのような取り組みを行っているのかを情報共有することで、「ビジネス現場でのAI活用に生かせるスキル」を授業に組み込んでいく大きなヒントとなった。そのうえで、他の科目ではAIを活用せずに学ばせたい内容がある場合、その内容には影響しないように配慮する連携が可能となった。

創価女子短期大学では、AI活用推進WGを中心に分野を超えて授業でのAI活用に取り組んできた。「SWC-AI活用教育の枠組み」のもとに連携したことで、情報系科目で習得するAIを活用したスタディスキルをベースに、「ビジネス現場でのAI活用に生かせるスキル」を意識した授業設計を行うことが可能となった。今後もAIを活用できる人材の育成のために実践を積み上げていきたい。

## 参考文献

- 大森不二雄、斉藤準、松葉龍一、喜多敏博（2023）「大学生の ChatGPT 利用状況と能力形成への影響に関する調査結果（速報）」科学立国のための大学教育変革センター（DBER Center）[https://dber.jp/wp-content/uploads/2023/06/chatgpt\\_report.pdf](https://dber.jp/wp-content/uploads/2023/06/chatgpt_report.pdf)（2024年8月参照）。
- 竹中徹、齊藤鉄也、佐原太郎、永井恵一（2024）「AI活用による学部教育の新地平」淑徳大学 教育学部・経営学部・地域創生学部研究年報 第7号。
- 文部科学省（2023）「大学・高専における生成 AI の教学面の取扱いについて（周知）」[https://www.mext.go.jp/content/20230714-mxt\\_senmon01-000030762\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230714-mxt_senmon01-000030762_1.pdf)（2024年8月参照）。
- NHK ニュース（2024）学校での生成 AI ガイドライン改訂へ専門家会議での議論始まる（2024年7月25日 NHK）<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240725/k10014523271000.html>（2024年8月参照）。